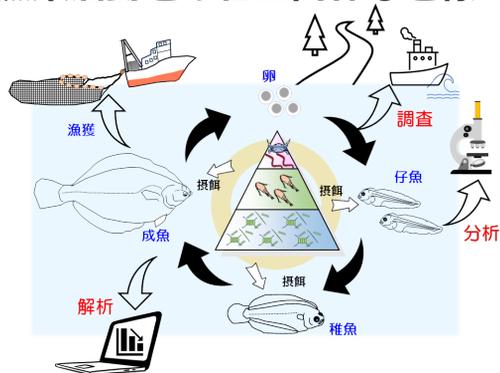


地域にとって重要な水産資源の「持続可能な利用」の実現に貢献します

日本の漁業生産量は減少の一途をたどっています。埋め立て等による干潟・浅場、藻場の消失や気候変動に伴う海水温の上昇のほか、水質・底質の悪化や近年の貧栄養化、水産資源と漁業活動との相互関係など様々な要因が指摘されています。水産資源を持続可能とするには、資源と環境の動態を把握する必要があります。当社では、対象海域の特性に応じて、漁業実態を把握し、水産生物の生活史段階ごとの分布量と、餌料生物や環境条件との関係を詳細に把握するため、現地調査から解析まで実施します。



提供
する
サー
ビス

◆漁業実態を把握します

標本船調査や聞き取り調査、買い取り調査などを実施し、漁獲量や漁場を把握するほか、その季節変化や漁獲物の生理生態（肥満度・雌雄・生殖腺成熟度など）を把握します。

◆生活史段階ごとの分布量を調査します

対象生物の生活史段階に応じた適切な調査手法を選択し、卵、幼生、成体などの生活史段階ごとの分布量を正確に把握します。

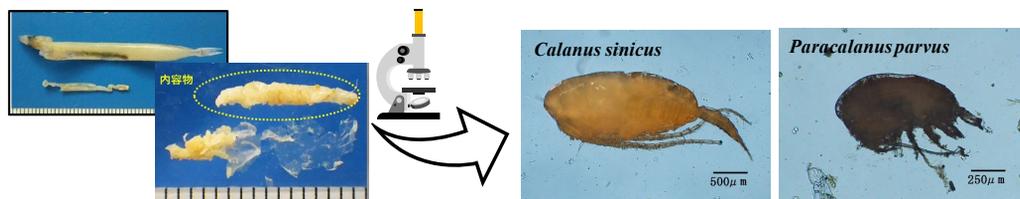
◆食性を把握し、餌料生物との関係を解析します

胃内容物を分析し、重要な餌料生物を把握します。加えて、環境水中の餌料生物量や餌料生物の生産に関する環境項目を調査し、水産資源との関係を解析します。

◆生態系における対象生物（水産資源）の動態を解析します

対象生物（水産資源）とそれを取り巻く餌料環境や水域環境に関する調査結果を総合的に解析します。また、時空間的変化が把握できる数値モデルの開発も可能です。

【胃内容物分析の一例】



橋口晴穂・西川哲也・魚住香織・古澤一思・森 敦史・今尾和正・反田 實：播磨灘におけるイカナゴ当歳魚の胃内容物重量指数の経年的低下とその要因。水産海洋研究, 85(1)：24-32。

丸尾 哲平・反田 實・田口 浩一・市川 哲也・橋口 晴穂・今尾 和正（2022）：大阪湾・播磨灘におけるイカナゴ生活史モデルの開発—低次栄養段階生態系モデルとの結合—。海洋理工学会誌, 27（1）, 15-30。



株式会社 日本海洋生物研究所

MARINE BIOLOGICAL RESEARCH INSTITUTE OF JAPAN Co., Ltd.

〒142-0042 東京都品川区豊町4丁目3番16号
TEL 03-3787-2471 E-mail mbrij@mbrij.co.jp